



# Migration Toolkit for Applications 4.2

## Web コンソールガイド

Red Hat Application Migration Toolkit の Web コンソールを使用して、分析のために  
アプリケーションをプロジェクトにグループ化



## Migration Toolkit for Applications 4.2 Web コンソールガイド

---

Red Hat Application Migration Toolkit の Web コンソールを使用して、分析のためにアプリケーションをプロジェクトにグループ化

Enter your first name here. Enter your surname here.

Enter your organisation's name here. Enter your organisational division here.

Enter your email address here.

## 法律上の通知

Copyright © 2023 | You need to change the HOLDER entity in the en-US/Web\_Console\_Guide.ent file |.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux<sup>®</sup> is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java<sup>®</sup> is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS<sup>®</sup> is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL<sup>®</sup> is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js<sup>®</sup> is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack<sup>®</sup> Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

## 概要

本ガイドでは、Migration Toolkit for Applications Web コンソールを使用して Java アプリケーションの移行を単純化する方法を説明します。

## 目次

<b>第1章 はじめに</b>	<b>3</b>
1.1. WEB コンソールガイドについて	3
1.2. MIGRATION TOOLKIT FOR APPLICATIONS について	3
Migration Toolkit for Applications とは	3
Migration Toolkit for Applications で移行を単純化する方法	3
詳細情報	3
1.3. WEB コンソールについて	3
<b>第2章 WEB コンソールのインストール</b>	<b>4</b>
2.1. ZIP インストール	4
2.1.1. 前提条件	4
2.1.2. Web コンソールのインストール	4
2.1.3. Web コンソールの起動	4
2.1.4. Web コンソールへのアクセス	4
2.2. OPENSIFT のインストール	5
2.2.1. 前提条件	5
2.2.2. Web コンソールの OpenShift イメージについて	5
OpenShift テンプレートの環境変数	7
2.2.3. MTA アプリケーションのデプロイ	7
2.2.4. Web コンソールへのアクセス	9
2.2.5. Web コンソール OpenShift インストールのトラブルシューティング	10
2.2.5.1. 最新のイメージバージョンを確認する	10
2.2.5.2. Web コンソールログの調査と収集	11
2.2.5.2.1. OpenShift コンソールの使用	11
2.2.5.2.2. OpenShift クライアントの使用	11
2.2.5.3. Web コンソール OpenShift の一般的な問題	12
2.2.5.3.1. エグゼキューター Pod が NoRouteToHostException を出力する	12
2.2.5.3.2. Pod ではリソースが十分でないという報告	12
2.2.5.3.3. Pod が利用可能になるまでに 600 秒以上かかる	12
2.2.5.4. Web コンソール OpenShift に関する問題の報告	13
<b>第3章 WEB コンソールでのアプリケーションの分析</b>	<b>15</b>
3.1. プロジェクトの追加	15
3.2. プロジェクトへのアプリケーションの追加	16
3.3. 解析設定の指定	17
3.4. 分析の実行	18
3.5. 分析結果の表示	18
3.5.1. 解析の詳細を調べる	19
3.5.2. レポートを確認する	20
<b>第4章 カスタムルールを使用する</b>	<b>21</b>
<b>第5章 WEB コンソールの認証設定</b>	<b>22</b>
5.1. WEB コンソールの認証の有効化	22
5.2. 管理ユーザーの認証情報の変更	22
5.3. デフォルトの WEB コンソールユーザーの削除	23
5.4. 新しい WEB コンソールユーザーの追加	24



# 第1章 はじめに

## 1.1. WEB コンソールガイドについて

Java アプリケーションやその他のコンポーネントを移行するために、Migration Toolkit for Applications (MTA) を使用するエンジニア、コンサルタント、およびその他のユーザーを対象としています。ここでは、Web コンソールを使用して移行プロジェクトを管理し、アプリケーションを解析する方法を説明します。

## 1.2. MIGRATION TOOLKIT FOR APPLICATIONS について

### Migration Toolkit for Applications とは

Migration Toolkit for Applications (MTA) は、拡張およびカスタマイズ可能なルールベースのツールセットで、Java アプリケーションの移行を容易にします。

MTA は、プロジェクトソースディレクトリーやアプリケーションアーカイブを含むアプリケーションアーティファクトを検査し、変更を必要とするエリアを強調表示する HTML レポートを作成します。MTA を使用して、以前のバージョンの Red Hat JBoss Enterprise Application Platform から、または Oracle® WebLogic Server や IBM® WebSphere® Application Server などの他のコンテナから Java アプリケーションを移行できます。

### Migration Toolkit for Applications で移行を単純化する方法

Migration Toolkit for Applications は一般的なリソースを探し、アプリケーションを移行する際のテクノロジーと既知の問題点を明らかにします。この目的は、アプリケーションが使用するテクノロジーの概要を提供し、組織がエンタープライズアプリケーションを Java EE および Red Hat JBoss Enterprise Application Platform に推定、文書化、移行するために使用できる詳細なレポートを提供することです。

### 詳細情報

Migration Toolkit for Applications の機能、サポートされている設定、システム要件、および使用可能なツールの詳細については、[スタートガイド](#) を参照してください。

## 1.3. WEB コンソールについて

Migration Toolkit for Applications の Web コンソールは、ユーザーのチームが多数のアプリケーションに対する移行およびモダナイゼーションの作業を評価および優先順位付けできる Web ベースのシステムです。これにより、分析のためにアプリケーションをプロジェクトにグループ化し、結果を強調表示する多数のレポートを提供します。

## 第2章 WEB コンソールのインストール

Web コンソールは、[ZIP ディストリビューション](#) または [OpenShift](#) を使用してインストールできます。

### 2.1. ZIP インストール

ZIP ディストリビューションを使用してインストールすると、MTA Web コンソールは Red Hat JBoss Enterprise Application Platform にデプロイされ、認証に Red Hat Single Sign-On を使用し、ストレージ用に H2 データベースでサポートされます。

#### 2.1.1. 前提条件

次の前提条件を満たしていることを確認します。

- Java プラットフォーム、JRE バージョン 8+
- 最低 8 GB の RAM。16GB 推奨



#### 注記

macOS を実行している場合は、ユーザープロセスの最大数 **maxproc** を少なくとも **2048** に設定し、開いているファイルの最大数 **maxfiles** を **100000** に設定することを推奨します。

#### 2.1.2. Web コンソールのインストール

1. [MTA Download ページ](#) から Web コンソールをダウンロードします。
2. .zip ファイルを任意のディレクトリーに解凍します。  
このファイルを解凍して作成されたディレクトリーへのパスは、このガイド全体で **RHAMT\_HOME** と呼ばれます。

#### 2.1.3. Web コンソールの起動

スクリプトを実行して、Web コンソールを開始します。

```
$ RHAMT_HOME/run_rhamt.sh
```



#### 注記

Windows 環境では、**run\_rhamt.bat** スクリプトを使用します。

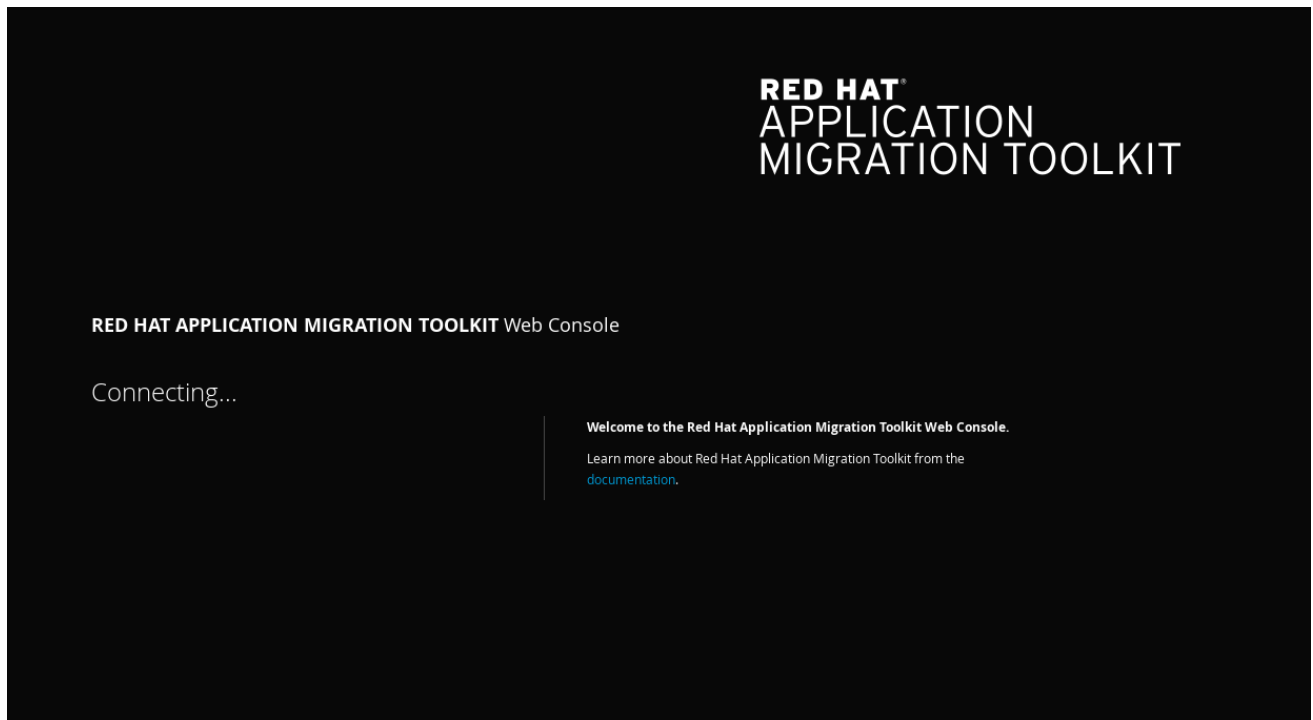
ブラウザから [Web コンソールにアクセス](#) できるようになりました。

#### 2.1.4. Web コンソールへのアクセス

**起動** すると、Web コンソールはデフォルトでローカルホスト (<http://localhost:8080/rhamt-web>) のブラウザからアクセスできます。



図2.1 Welcome ページ



Web コンソールは、デフォルトのユーザーを使用して自動的に認証を行います。デフォルトのユーザーの認証情報は **rhamt** および **password** です。Web コンソールにアクセスするために個々のユーザーに認証を要求するには、[Web コンソールの認証の設定](#) を参照してください。

## 2.2. OPENSIFT のインストール

OpenShift にインストールすると、MTA Web コンソールは Red Hat JBoss Enterprise Application Platform にデプロイされ、認証に Red Hat Single Sign-On を使用し、ストレージ用に PostgreSQL データベースでサポートされます。

### 2.2.1. 前提条件

次の前提条件を満たしていることを確認します。

- OpenShift Container Platform バージョン 3.5 以降のインスタンスにアクセスできる必要があります。
- OpenShift インスタンスには、ミドルウェアイメージストリームがインストールされている必要があります。
- ローカルマシンに OpenShift Container Platform CLI がインストールされている必要があります。
- ローカルマシンで Linux または macOS を実行している必要があります。Windows は現在サポートされていません。

詳細については、[OpenShift Container Platform のドキュメント](#) を参照してください。

### 2.2.2. Web コンソールの OpenShift イメージについて

Red Hat は、OpenShift で使用するために設計された MTA のコンテナ化されたイメージを提供します。これらのイメージ開発者は、移行プロジェクトの迅速かつ簡単に管理し、アプリケーションの解析を実行できます。

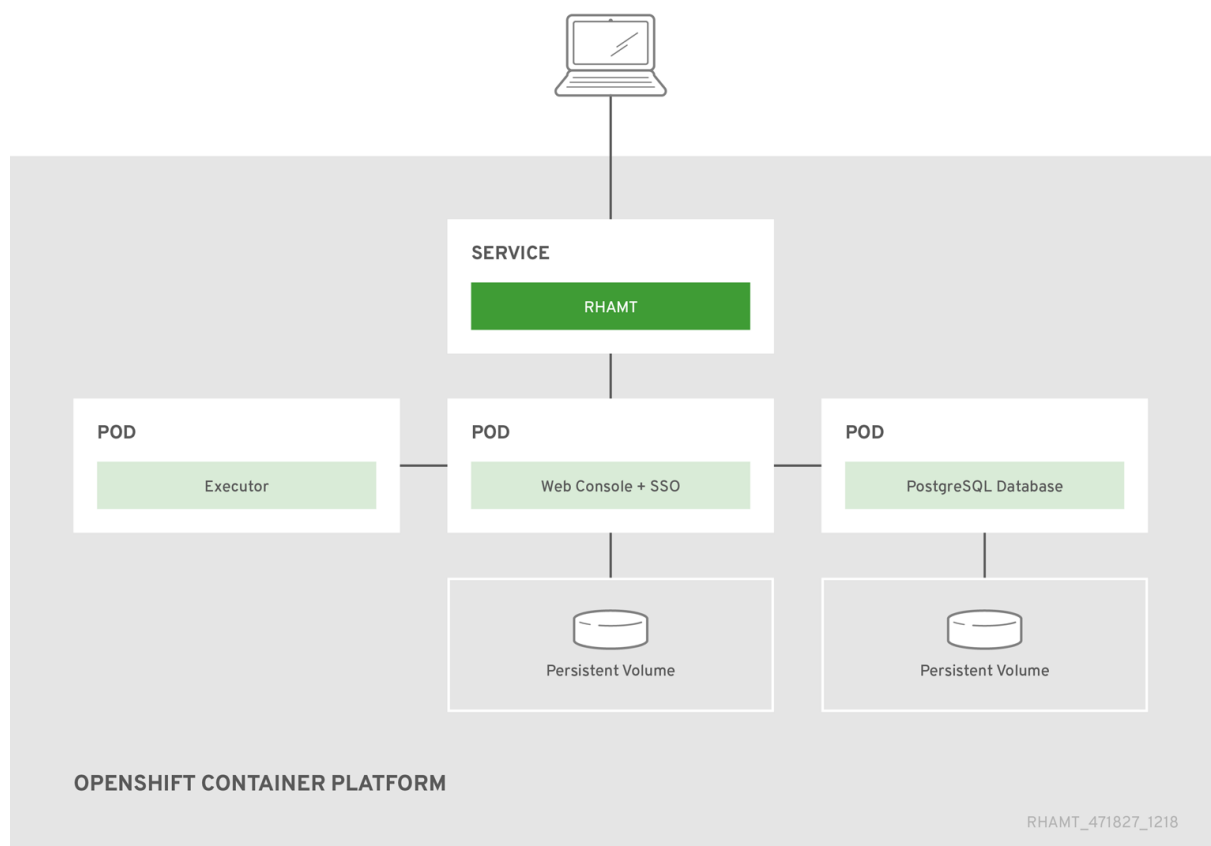
OpenShift イメージには、3 つの個別の Pod が含まれています。

- 分析の実行とレポートの生成を担当するエグゼキューター
- Web コンソール自体へのアクセスを提供する Web コンソールインターフェイスと SSO
- プロジェクトの設定と分析追跡情報を格納する PostgreSQL データベース

Web コンソールインターフェイスと PostgreSQL Pod には、個別の永続ボリュームが使用されます。ただし、エグゼキューターのストレージは、使用されるテンプレートに依存します。

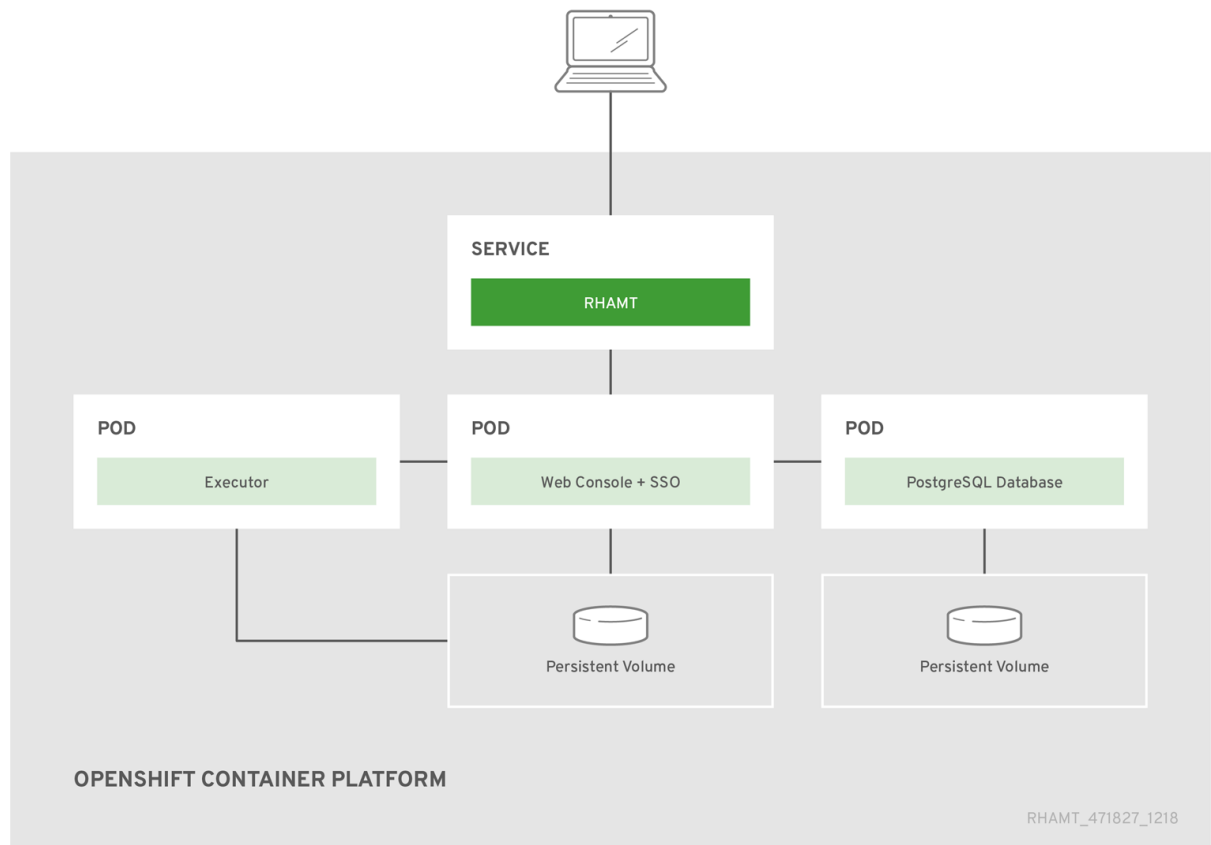
- **web-template-empty-dir-executor.json** は推奨されるテンプレートです。1 台のマシンで一時ストレージを使用するようにエグゼキューター Pod を設定し、永続ボリュームが定義されません。解析データは、RESTful Web サービスを使用して、エグゼキューター Pod と Web コンソール Pod の間で送信されます。

図2.2 web-template-empty-dir-executor.json



- **web-template-empty-dir-executor-shared-storage.json** は使用できる代替のテンプレートです。このテンプレートは、共有永続ボリュームを使用するように、エグゼキューター Pod および Web コンソール Pod を設定します。これらの Pod のすべてのインスタンスは、OpenShift で **ReadWriteMany** としてマウントされている同じ永続ボリュームに読み取り、書き込みます。

図2.3 web-template-empty-dir-executor-shared-storage.json



### OpenShift テンプレートの環境変数

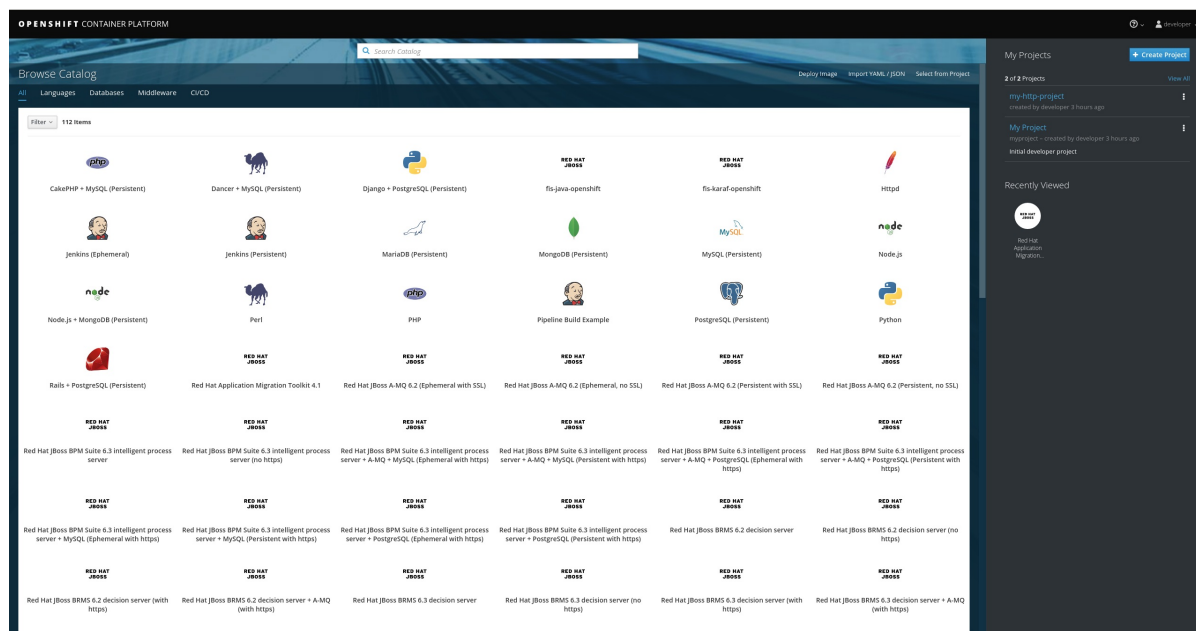
OpenShift イメージ環境変数は、アプリケーション解析のベースラインとして設定され、さまざまな環境で適切に機能します。解析の実行には、追加の設定は必要ありません。

変更される最も一般的な環境変数は、各イメージに割り当てられる CPU およびメモリーリソースです。これには、**NODE\_NAME** の後に **REQUESTED\_RESOURCE** が続くパターンが含まれています。たとえば、**EXECUTOR\_REQUESTED\_CPU** はエグゼキューター Pod を要求する CPU コア数を示し、**EXECUTOR\_REQUESTED\_MEMORY** はエグゼキューター Pod を要求するメモリー量を示します。

すべての環境変数と、各テンプレートの説明が表示されます。

### 2.2.3. MTA アプリケーションのデプロイ

1. [MTA Download ページ](#) から Web コンソールをダウンロードします。
2. .zip ファイルを任意のディレクトリーに解凍します。  
このファイルを解凍して作成されたディレクトリーへのパスは、このガイド全体で **RHAMT\_HOME** と呼ばれます。
3. OpenShift Web コンソールへのアクセス次のイメージのようになります。



4. Web コンソールの右上隅にある **Import YAML / JSON** ボタンをクリックします。
5. 以下に示すように、表示されるウィンドウに次の情報を入力します。

**Import YAML / JSON**
✕

YAML / JSON
Results

1
2

**Create Project**

**\* Project Name**

A unique name for the project.

**Project Display Name**

**Project Description**

Create or replace resources from their YAML or JSON definitions. If adding a template, you'll have the option to process the template.

Upload a file by dragging & dropping, selecting it, or pasting from the clipboard.

1

{"kind": "Template"}

- a. **rhamt** などの **Project Name** を定義します。
- b. 必要に応じて、プロジェクトの説明に役立つ **Project Display Name** を定義します。
- c. 必要に応じて、**Project Description** を定義して、プロジェクトの使用方法に関するコンテキストを提供します。

- d. **Browse** ボタンをクリックして、目的の Web コンソールテンプレートをインポートします。これらは **RHAMT\_HOME/openshift/templates** に含まれています。インポートすると、JSON が下部のテキスト領域に表示されます。
6. **Create** ボタンをクリックして、次の画面に進みます。
7. 今後のプロジェクトのリソースとしてテンプレートを保存する場合は、**Save template** ボックスをオンにします。
8. **Continue** ボタンをクリックして、次の画面に進みます。
9. 指定されたデフォルト値を確認し、必要に応じて調整します。たとえば、**web-template-empty-dir-executor.json** ファイルは、2つの CPU、4GB のメモリ、および 20GB の永続ボリュームを定義します。
10. **Create** ボタンをクリックして、テンプレートをプロジェクトにインポートします。

完了すると、ブラウザから [Web コンソールにアクセス](#) できます。

## 2.2.4. Web コンソールへのアクセス

Web コンソールが [OpenShift にデプロイ](#) されると、ブラウザからアクセスできるようになります。**deploy.sh** スクリプトは、Web コンソールを開くために使用する **WEB\_CONSOLE\_URL** のようにリンクを出力します。

例: **deploy.sh** 出力

```
...
-> Deploy RHAMT Web Console ...
Upload, build and deployment successful!

Open WEB_CONSOLE_URL to start using the RHAMT Web Console on OpenShift
(user='rhamt',password='password')
```

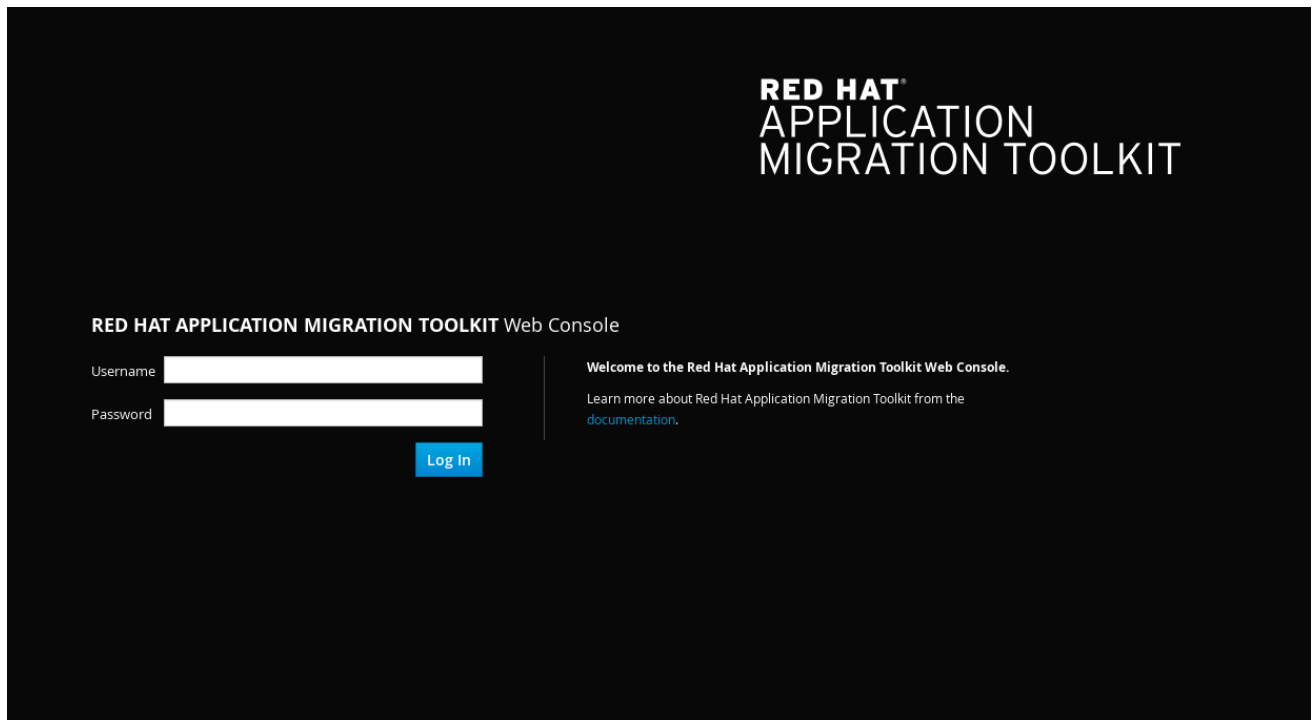
**OPENSIFT\_URL/console/project/rhamt/overview** の OpenShift コンソールから Web コンソールにアクセスするには、**RHAMT WEB CONSOLE HTTP** アプリケーションのリンクをクリックします。[デプロイ](#) 時に OpenShift プロジェクトの名前を変更した場合は、この URL の **rhamt** をプロジェクトの名前に置き換えてください。



### 注記

Web コンソールがすぐに読み込まれない場合は、OpenShift コンソールのプロジェクトのステータスを確認し、これが処理されているか、またはエラーがあったかどうかを確認します。

図2.4 Welcome ページ



Web コンソールにアクセスするには、認証が必要です。デフォルトのユーザーの認証情報は **rhamt** および **password** です。Web コンソールの認証の設定の詳細については、[Web コンソールの認証の設定](#)を参照してください。

### 2.2.5. Web コンソール OpenShift インストールのトラブルシューティング

以下の手順では、OpenShift 環境で Web コンソールのトラブルシューティングを行う一般的な手法を説明します。これらの手順は、Web コンソールに固有の問題に焦点を当てています。OpenShift 固有の問題については、次のトラブルシューティングセクションを参照してください。

- [OpenShift SDN のトラブルシューティング](#)
- [ビルドのトラブルシューティング](#)

#### 2.2.5.1. 最新のイメージバージョンを確認する

OpenShift 環境のトラブルシューティングの最初のステップは、最新のイメージが使用されていることを確認することです。



#### 注記

JSON テンプレートで貼り付けて Web コンソールをデプロイした場合、イメージストリームは作成されず、以下の手順は適用されません。

OpenShift 環境から、次の手順を実行します。

1. **OPENSIFT\_URL/console/project/rhamt/overview** に移動して、OpenShift コンソールにアクセスします。[デプロイ](#) 時に OpenShift プロジェクトの名前を変更した場合は、この URL の **rhamt** をプロジェクトの名前に置き換えてください。
2. コンソールの左側にある **Builds** にカーソルを合わせます。
3. 表示されるオプションから **Images** をクリックします。

4. **Tags** 下のコラムに、各イメージが **latest** のストリームにあることを確認します。
5. 最新のイメージが使用されていない場合は、[OpenShift インストール](#) の手順に従って Web コンソールの最新イメージを再デプロイします。

### 2.2.5.2. Web コンソールログの調査と収集

各 Pod は、問題の正確な原因を絞り込むのに役立つ詳細なロギングを提供するために設定されます。以下の手順では、これらのログを表示および取得する方法を説明します。

#### 2.2.5.2.1. OpenShift コンソールの使用

次の手順では、各 Pod のログを調べるプロセスを順を追って説明します。

1. **OPENSIFT\_URL/console/project/rhamt/overview** に移動して、OpenShift コンソールにアクセスします。[デプロイ](#) 時に OpenShift プロジェクトの名前を変更した場合は、この URL の **rhamt** をプロジェクトの名前に置き換えてください。
2. コンソールの左側にある **Applications** にカーソルを合わせます。
3. 表示されるオプションから **Pods** をクリックします。
4. 検証する Pod の名前をクリックします。現在の Web コンソール Pod を確認するには、**Running** 状態の **rhamt-web-console-POD\_NAME** を選択します。
5. 上部のオプションから **Logs** をクリックします。
6. ログファイルをダウンロードするには、ページの上部に移動し、**Download** をクリックします。

#### 2.2.5.2.2. OpenShift クライアントの使用

1. **oc get pods** を実行して Pod 名を特定し、**Running** ステータスの **web-console** エントリーを検索します。

```
$ oc get pod
sNAME          READY  STATUS   RESTARTS  AGE
eap-builder-1-build 0/1    Completed 0          1d
rhamt-postgresql-1-hfbdn 1/1    Running   0          1d
rhamt-sso-1-build 0/1    Completed 0          1d
rhamt-web-console-1-build 0/1    Completed 0          1d
rhamt-web-console-1-vt7s5 1/1    Running   1          1d
sso-1-wjl2n      1/1    Running   1          1d
```

上記の例では、これは **rhamt-web-console-1-vt7s5** です。

2. **oc logs** を使用して、現在の Pod のログを調べます。

```
oc logs POD_NAME
```

3. 出力は、現在のログのコピーを取得するためにリダイレクトされる可能性があります。

```
oc logs POD_NAME > ./rhamt-openshift-POD_NAME.log
```

### 2.2.5.3. Web コンソール OpenShift の一般的な問題

#### 2.2.5.3.1. エグゼキューター Pod が `NoRouteToHostException` を出力する

エグゼキューター Pod のログにアクセスする際に、以下のエラーが表示されます。

```
13:44:03,501 SEVERE [org.jboss.windup.web.messaging.executor.ExecutorBootstrap] (main) Could
not start messaging listener due to: Failed to connect to any server. Servers tried: [http-
remoting://192.0.2.4:8080 (java.net.NoRouteToHostException: No route to host)]:
javax.naming.CommunicationException: Failed to connect to any server. Servers tried: [http-
remoting://192.0.2.4:8080 (java.net.NoRouteToHostException: No route to host)]
[...]
```

意味:

`NoRouteToHostException` は、この Pod が Web コンソール Pod に接続できないことを示します。

解決方法:

新規デプロイメントでは、Web コンソールの前にエグゼキューターが開始されるため、これは想定されます。それ以外の場合は、Web コンソール Pod を調べ、ここで表示されるエラーを解決します。Web コンソールが正常に実行されたら、エラーが解決されるはずです。

#### 2.2.5.3.2. Pod ではリソースが十分でないという報告

OpenShift で Web コンソールをデプロイしようとする、Pod は起動できず、以下のエラーが **Events** タブに表示されます。

```
0/9 nodes are available: 4 Insufficient cpu, 4 MatchNodeSelector, 9 Insufficient memory.
```

意味:

OpenShift プロジェクトのリソースクォータが満たされ、Pod は要求されたリソースを取得できません。

解決方法:

以下のいずれかを実行します。

- OpenShift プロジェクトのクォータを増やします。OpenShift クォータの詳細は、[Quotas and Limit Ranges](#) および [Setting Limit Ranges](#) を参照してください。
- Web コンソールの OpenShift プロジェクトの要求されるリソースを減らします。このプロジェクトに少なくとも 2 つの CPU および 4 GB のメモリーを使用することを推奨します。

リクエストが利用可能なクォータに置かれたら、再度デプロイメントを試行します。

#### 2.2.5.3.3. Pod が利用可能になるまでに 600 秒以上かかる

デプロイメントの試行後に、**-deploy** Pod がタイムアウトし、以下のエラーを報告します。

```
error: update acceptor rejected rhamt-web-console-executor-1: pods for rc 'rhamt/POD_NAME' took
longer than 600 seconds to become available
```

これらのエラーは Pod のタイムアウト後に表示され、エラー状態になります。



**意味:**

デプロイメント Pod は Pod を正常に起動できません。

このエラーはいくつかの原因によって発生する可能性があり、以下が最も一般的です。

- 現在、OpenShift インスタンスは Pod を適時にデプロイするためのリソースが不足しています。
- イメージはレジストリーから正常にプルできませんでした。

**解決方法:**

デプロイメントを再度試行し、デプロイメントの作成中にデプロイメント以外の Pod のログおよびイベントを表示します。これらのメッセージは、デプロイメント Pod のタイムアウトにつながる基礎となるエラーにコンテキストを提供します。

- OpenShift インスタンスがリソース不足の状態にある最初の問題に対処するには、OpenShift ドキュメントの [クラスター管理](#) ガイドの [Analyzing Cluster Capacity](#) の手順に従って、クラスター容量を判断します。容量が増やされたり、実行したジョブが少なくなると、再度デプロイメントを試行します。
- 2つ目の問題 (イメージがレジストリーからプルできない) に対処するには、イメージが存在することを確認するために [レジストリーにアクセス](#) します。このリンクには、Docker レジストリーのログを調べる手順も含まれ、問題をさらにトラブルシューティングするために使用できます。

**2.2.5.4. Web コンソール OpenShift に関する問題の報告**

{ProductName} は JIRA を問題追跡システムとして使用します。Web コンソールの使用中に問題が発生した場合は、以下の手順に従って JIRA で問題を作成してください。

**注記**

JIRA で問題を作成するために、すでに JIRA アカウントにサインアップする必要があります。

1. ブラウザーを開き、JIRA の [Create Issue](#) ページに移動します。  
ログインしていない場合は、ページの右上にある **Log In** リンクをクリックし、認証情報を入力します。
2. 以下のオプションを選択し、**Next** ボタンをクリックします。
  - **Project:** [Red Hat Application Migration Toolkit \(WINDUP\)](#)を選択します。
  - **問題のタイプ:** [バグ](#)
3. 次の画面では、以下のフィールドを入力します。
  - **Summary:** 問題または問題の簡単な説明を入力します。
  - **Environment:** これは Web コンソールの OpenShift インストールであり、イメージで使用する環境変数をすべて含めます。
  - **Description:** 問題の詳細情報を指定します。発生したエラーと例外トレースを必ず含めてください。

- **Attachment:** [Web コンソールのログの調査と収集](#) で取得したログを含めてください。少なくとも、これには各 Pod からのログが含まれるはずです。  
問題を生じるアプリケーションまたはアーカイブに機密情報が含まれておらず、MTA 開発チームと共有する場合は、**browse** ボタンを使用して問題を添付します。

4. **Create** ボタンをクリックして JIRA の問題を作成します。

## 第3章 WEB コンソールでのアプリケーションの分析

Web コンソールを使用してアプリケーションを解析するには、プロジェクトを作成する必要があります。各プロジェクトは、解析するためにアプリケーションをグループ化し、アプリケーションの解析中に使用する設定を指定する方法です。解析プロセスにより、移行またはモダライゼーション化作業に必要な変更に関する情報を提供するレポートが生成されます。

以下の手順に従って、Web コンソールを使用してアプリケーションを解析し、結果を確認します。

1. プロジェクトを追加します。
2. アプリケーションをプロジェクトに追加します。
3. 解析設定を指定します。
4. 解析を実行します。
5. 解析の結果を表示します。



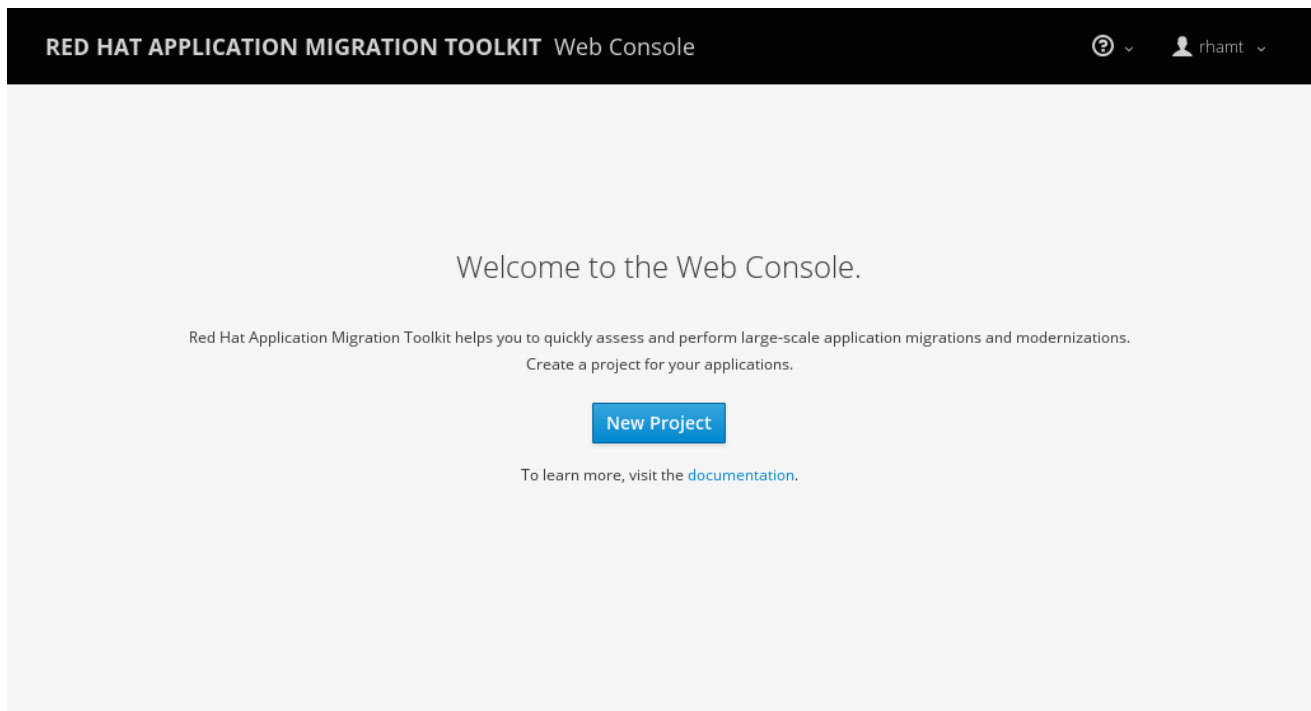
### 注記

Web コンソールの上部にある **Projects** リンクをクリックし、いつでもプロジェクト一覧に戻ります。**About** ページのヘルプメニューおよび MTA ドキュメントへのリンクを参照してください。

### 3.1. プロジェクトの追加

Web コンソールに初めてアクセスすると、新規プロジェクトを設定するように求められます。

図3.1 ホーム



**New Project** ボタンをクリックしてウィザードを起動し、新しい移行プロジェクトを設定します。

図3.2 プロジェクトの追加

The screenshot shows the 'Create Project' step in the Red Hat Application Migration Toolkit Web Console. The header bar is black with the text 'RED HAT APPLICATION MIGRATION TOOLKIT Web Console' on the left and a help icon and user 'rhamt' on the right. Below the header is a progress bar with three steps: 'Create Project' (highlighted in blue), 'Add Applications', and 'Configure the Analysis'. The main content area is titled 'Create Project' and contains two input fields: 'Name' with the value 'Test Project' and a description 'A unique name for the project', and 'Description' with a placeholder 'A short description of the project.' and a text area. At the bottom right are 'Cancel' and 'Next' buttons.

このプロジェクトの名前とオプションの説明を指定し、**Next** をクリックして続行します。

## 3.2. プロジェクトへのアプリケーションの追加

このプロジェクトに追加するアプリケーションを指定します。[アプリケーションをアップロード](#)したり、アプリケーションが含まれる [サーバーパスを登録](#) することができます。

図3.3 アプリケーションの追加

The screenshot shows the 'Add Applications' step in the Red Hat Application Migration Toolkit Web Console. The header bar is black with the text 'RED HAT APPLICATION MIGRATION TOOLKIT Web Console' on the left and a help icon and user 'rhamt' on the right. Below the header is a progress bar with three steps: 'Create Project', 'Add Applications' (highlighted in blue), and 'Configure the Analysis'. The main content area is titled 'Add Applications' and shows a progress bar for 'jee-example-app-1.0.0.ear (0.90 MB)' at 100% completion. Below this are two tabs: 'Upload' (active) and 'Server Path'. The 'Upload' tab contains a text area with the instruction 'Choose files to upload to your project. You can select more than one file at a time. You can also drag and drop files to start uploading.' and a 'Choose Files' button. Below the text area is a dashed box with the text 'Drop files here.' At the bottom right are 'Back' and 'Next' buttons.

### アプリケーションのアップロード

**Choose Files** ボタンを使用してアプリケーションを選択するか、指定した領域にアプリケーションをドラッグアンドドロップできます。これにより、選択したアプリケーションを MTA サーバーにアップロードします。

## サーバーパスの登録

**Server Path** タブを選択し、このプロジェクトに含まれるアプリケーションが含まれるサーバーにパスを入力します。これはファイルを MTA サーバーにコピーせずに、指定した場所のアプリケーションを評価します。

これは、以下の場合に役に立ちます。

- たとえば、夜間自動ビルドプロセスからアプリケーションが含まれるサーバー上で既存のディレクトリーを登録する必要があります。これにより、MTA サーバーは最新バージョンのアプリケーションを解析します。
- アプリケーションを展開した Java アーカイブとして登録します。この場合は、**Directory is an exploded Java application archive** チェックボックスがオンであることを確認します。

このプロジェクトに1つ以上のアプリケーションを指定したら、**Next** をクリックして続行します。

## 3.3. 解析設定の指定

変換パス、パッケージ、その他の高度なオプションなど、解析の設定を行います。

図3.4 分析の設定

RED HAT APPLICATION MIGRATION TOOLKIT Web Console

Create Project Add Applications **Configure the Analysis**

### Analysis Configuration

**\* Transformation path**

☒ Migration to JBoss EAP 7
 ☐ Migration to JBoss EAP 6
 ☐ Cloud readiness only

Select the transformation path for your applications.

☐ Cloud readiness analysis  
 Check this box to also assess your applications for cloud and container readiness.

**Included packages**

- ☐ com
- ☐ org
- ☐ weblogic

Select the Java packages to decompile and analyze. If no packages are selected, all will be analyzed.

> Exclude packages  
 > Use custom rules  
 > Advanced options

Back Save **Save & Run**

## 変換パス

アプリケーションの変換パスを選択します。現在のオプションは次のとおりです。

- JBoss EAP 7 への移行  
ルールを実行してアプリケーションを Red Hat JBoss Enterprise Application Platform 7 に移行します。
- JBoss EAP 6 への移行  
ルールを実行してアプリケーションを Red Hat JBoss Enterprise Application Platform 6 に移行します。
- cloud-readiness のみ

クラウドおよびコンテナ環境のアプリケーションを評価するためのルールのみを実行します。

JBoss EAP への移行を選択した場合、**Cloud readiness analysis**チェックボックスをオンにしてクラウド readiness ルールを実行することもできます。

### パッケージを含める

解析するパッケージを選択します。何も選択されないと、すべてのパッケージが逆コンパイルおよび解析されます。

### パッケージを除外する

解析から除外するパッケージを選択します。

### カスタムルール

解析中に使用するカスタムルールセットを選択します。カスタムルールの登録と削除の手順については、[カスタムルールの使用](#)を参照してください。

カスタムルールセットが登録されると、表示されたルールをクリックして強調表示することで、実行するように選択できます。強調表示されたルールをクリックすると、プロジェクトの選択が解除されます。実行中、強調表示されたすべてのルールが分析に含まれます。

すべてのカスタムルールセットを選択するには、**Select All** をクリックします。すべてのカスタムルールセットの選択を解除するには、**Clear All** をクリックします。

### 高度な設定

追加の MTA オプションを設定します。各 MTA 引数の説明は、MTA CLI ガイドの [MTA コマンドライン引数](#)を参照してください。

**Save** をクリックして解析設定を保存するか、これらの設定を使用して、**Save & Run** をクリックして [解析を保存および実行](#) します。

## 3.4. 分析の実行

解析設定ページから、**Save & Run** ボタンをクリックして解析を実行します。

**Analysis** ページで、現在実行している解析の進捗が表示されます。完了した、キューに入れられた、および進行中の実行が表にリストされます。**Run Analysis** をクリックし、最新の設定で解析を再実行します。

## 3.5. 分析結果の表示

プロジェクトで MTA 解析を実行すると、解析 ID、ステータス、および開始日が表に一覧表示されます。各行には、解析の詳細と生成されたレポートの表示、解析のキャンセルおよび削除など、その解析に使用できるアクションが含まれています。

図3.5 解析リスト

RED HAT APPLICATION MIGRATION TOOLKIT Web Console

Project: Test Project

Analysis Results

Active Analysis

Analysis: #4 Task: MigrationRulesPhase - weblogic-eap7-eap7 - weblogic-eap7-10000 (218/533)

Analysis Results

Analysis	Status	Start Date	Applications	Actions
#4	In progress for 14 seconds	7/3/2017, 4:12 PM	1	<a href="#">i</a> <a href="#">x</a>
#3	Cancelled after 5 seconds	7/3/2017, 4:11 PM	1	<a href="#">i</a> <a href="#">x</a>
#2	Completed in 26 seconds	7/3/2017, 4:11 PM	1	<a href="#">i</a> <a href="#">x</a> <a href="#">d</a>
#1	Completed in 45 seconds	7/3/2017, 4:09 PM	1	<a href="#">i</a> <a href="#">x</a> <a href="#">d</a>

Analysis 列のリンクをクリックして [レポートを表示](#) するか、Actions 列で情報アイコンをクリックして [解析の詳細を表示](#) します。

### 3.5.1. 解析の詳細を調べる

解析の詳細は、解析結果テーブルの Actions コラムの情報アイコンをクリックして表示できます。

図3.6 解析の詳細

RED HAT APPLICATION MIGRATION TOOLKIT Web Console

Project: Test Project

Analysis Results

Analysis #4

Details Applications (1) Rules Logs

Status

Status ✓ Completed

Started 7/3/2017, 4:12 PM

Duration 24 seconds

Report [Open](#)

Configuration

Transformation path Migration to JBoss EAP 7

このページでは、この解析に関する情報を以下のタブを提供します。

#### Details

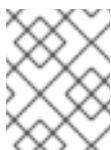
このタブには、解析のステータス、開始日、および解析に使用された設定が表示されます。

#### Applications

このタブには、この解析に含まれるアプリケーションを一覧表示しています。

## Rules

このタブには、この解析中に評価されたルールが一覧表示されます。



### 注記

ユーザードロップダウンメニューから **Rules Configuration** を選択すると、すべてのシステムおよびカスタムルールを表示できます。

## Logs

このタブには、この MTA 解析エンジンの実行からの出力が表示されます。

### 3.5.2. レポートを確認する

解析テーブルから **Actions** 列のレポートリンクをクリックし、この解析のレポートを表示します。これにより、生成した MTA レポートが新たに開きます。

MTA レポートの詳細と、それらを使用して移行またはモダナイゼーションの取り組みを評価する方法は、MTA の CLI ガイドの [レポートの確認](#) セクションを参照してください。

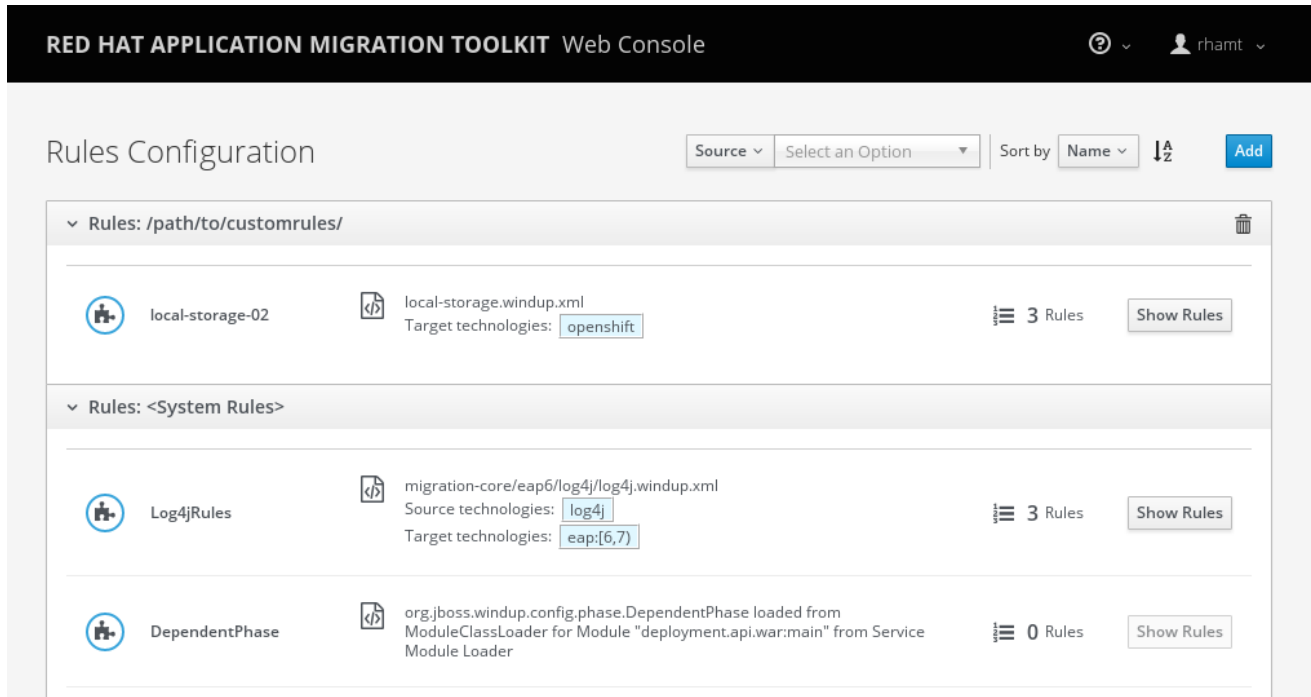


## 第4章 カスタムルールを使用する

アプリケーションの解析中に使用する独自のカスタムルールを追加できます。カスタム MTA ルールの作成に関する詳細は、MTA の [ルール開発ガイド](#) を参照してください。

ユーザードロップダウンメニューから **Rules Configuration** を選択し、既存のシステムおよびカスタムルールをすべて表示します。

図4.1 カスタムルールを追加する



独自のカスタムルールを追加するには、**Add** ボタンをクリックします。ルールをアップロードしたり、ルールが含まれるサーバーパスを登録することができます。

### ルールのアップロード

**Choose Files** ボタンを使用してルールセットファイルを選択するか、指定した領域にファイルをドラッグアンドドロップできます。これにより、選択したルールセットファイルを MTA サーバーにアップロードします。**Add** をクリックしてルールをアップロードします。

### サーバーパスの登録

**Server Path** タブを選択し、プロジェクトで利用可能なルールが含まれるサーバーにパスを入力します。これはファイルを MTA サーバーにコピーせず、解析中に指定した場所にあるルールを使用します。これにより、ルールがこの場所で更新されると、MTA サーバーは解析中に常に最新バージョンのルールを使用します。**Add** をクリックして、ルールを登録します。

カスタムルールセットは、プロジェクトの解析時に個別に選択できます。これらのルールセットを有効にするには、[解析設定](#) の **Use local custom rules** セクションでルールセットを選択します。

## 第5章 WEB コンソールの認証設定

認証が必要なように Web コンソールを設定できます。これは Red Hat Single Sign-On によって処理されます。有効にする場合は、Web コンソールへのアクセスが付与される前にユーザーを認証する必要があります。

Web コンソールの認証を設定するには、以下の手順を実行することが推奨されます。

1. [Web コンソールの認証を有効にします。](#)



### 注記

[OpenShift に Web コンソールをインストール](#) している場合、認証はすでに有効にされており、無効にすることはできません。

2. [管理ユーザーの認証情報を変更します。](#)
3. [デフォルトの Web コンソールユーザーを削除します。](#)
4. [Web コンソールユーザーを追加します。](#)

### 5.1. WEB コンソールの認証の有効化



### 注記

[OpenShift に Web コンソールをインストール](#) している場合、認証はすでに有効にされており、無効にすることはできません。

以下のスクリプトを実行して、ユーザーが Web コンソールにアクセスする前にログインする必要があります。このスクリプトは、ユーザーが Web コンソールへのアクセスを付与する前に認証を要求するように Red Hat Single Sign-On ログインページを設定します。

```
$ RHAMT_HOME/switch_to_authentication_required.sh
```



### 注記

Windows 環境では、**switch\_to\_authentication\_required.bat** スクリプトを使用します。

今回のリリースにより、[Web コンソールを起動](#) するたびに、Web コンソールにアクセスするためにユーザーが認証される必要があります。

### 5.2. 管理ユーザーの認証情報の変更

Web コンソールの [認証を有効にする](#) と、ユーザー名 **admin** およびパスワードの **password** でデフォルトの管理ユーザーが提供されます。Web コンソールユーザーには、承認されたパスワードのみがさらに変更できるように、このパスワードを変更する必要があります。

デフォルトの管理ユーザーのパスワードを変更するには、以下の手順に従います。

1. Web コンソールが [実行](#) されていることを確認します。

## 2. Red Hat Single Sign-On 管理コンソールを開きます。

- ZIP インストールの場合:
  - a. ブラウザーで <http://localhost:8080/auth/> に移動します。
  - b. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。
- OpenShift インストールの場合:
  - a. ブラウザーで **OPENSHIFT\_URL/console/project/rhamt/overview** に移動します。



### 注記

**デプロイ** 時に OpenShift プロジェクトの名前を変更した場合は、**rhamt** をプロジェクトの名前に置き換えます。

- b. **SSO HTTPS** アプリケーションのリンクをクリックし、URL の末尾に/auth を追加します。
  - c. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。
3. **admin** および **password** のデフォルト認証情報を使用してログインします。
  4. 左上隅で、ドロップダウンリストから **Master** レルムを選択します。
  5. 左側のナビゲーションメニューで **Users** を選択し、**View all users** をクリックします。
  6. **admin** ユーザーの行から、**Edit** をクリックします。
  7. **Credentials** タブを選択します。
  8. **New Password** フィールドおよび **Password Confirmation** フィールドに新しいパスワードを入力します。
  9. **Temporary** フィールドを **OFF** に変更すると、ユーザーは次回ログイン時にパスワードを変更しなくても済みます。
  10. **Reset Password** をクリックしてから、ポップアップの **Change password** をクリックします。

このデフォルトの管理ユーザーを完全に削除し、独自の管理ユーザーを作成することもできます。ただし、デフォルトユーザーを削除する前に、新規ユーザーを追加してください。

## 5.3. デフォルトの WEB コンソールユーザーの削除

デフォルトの Web コンソールユーザーは、ユーザー名 **rhamt** およびパスワード **password** とともに Web コンソールが提供されます。Web コンソールの **認証を有効にする** と、このユーザーを削除し、認証されたユーザーのみが Web コンソールにアクセスできるようにする必要があります。

以下の手順に従って、デフォルトの Web コンソールユーザーを削除します。

1. Web コンソールが **実行** されていることを確認します。
2. Red Hat Single Sign-On 管理コンソールを開きます。

- ZIP インストールの場合:
  - a. ブラウザーで <http://localhost:8080/auth/> に移動します。
  - b. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。
- OpenShift インストールの場合:
  - a. ブラウザーで **OPENSIFT\_URL/console/project/rhamt/overview** に移動します。

**注記**

**デプロイ** 時に OpenShift プロジェクトの名前を変更した場合は、**rhamt** をプロジェクトの名前に置き換えます。

- b. **SSO HTTPS** アプリケーションのリンクをクリックし、URL の末尾に/auth を追加します。
  - c. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。
3. 管理ユーザーの認証情報を使用してログインします。デフォルトの認証情報は **admin** と **password** です。
4. 左上隅で、ドロップダウンメニューから **Rhamt** レルムを選択します。
5. 左側のナビゲーションメニューから **Users** を選択し、**View all users** をクリックします。
6. **rhamt** ユーザーの行から、**Delete** をクリックし、確認します。

## 5.4. 新しい WEB コンソールユーザーの追加

Web コンソールの **認証が有効になっている** 場合は、管理者がユーザーを追加して、Web コンソールにアクセスできるようにする必要があります。

以下の手順に従って、新しい Web コンソールユーザーを追加します。

1. Web コンソールが **実行** されていることを確認します。
2. Red Hat Single Sign-On 管理コンソールを開きます。
  - ZIP インストールの場合:
    - a. ブラウザーで <http://localhost:8080/auth/> に移動します。
    - b. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。
  - OpenShift インストールの場合:
    - a. ブラウザーで **OPENSIFT\_URL/console/project/rhamt/overview** に移動します。

**注記**

**デプロイ** 時に OpenShift プロジェクトの名前を変更した場合は、**rhamt** をプロジェクトの名前に置き換えます。

- b. **SSO HTTPS** アプリケーションのリンクをクリックし、URL の末尾に/auth を追加します。
  - c. **Administration Console** を選択して Red Hat Single Sign-On 管理コンソールにアクセスします。
3. 管理ユーザーの認証情報を使用してログインします。デフォルトの認証情報は **admin** と **password** です。
4. 左上隅で、ドロップダウンメニューから **Rhamt** レルムを選択します。
5. 左側のナビゲーションメニューから **Users** を選択し、**Add user** をクリックします。
6. **Username**、**First Name**、**Last Name**、およびその他の必須フィールドに入力して、**Save** をクリックします。
7. ユーザーを追加したら、**Credentials** タブを選択します。
8. **New Password** と **Password Confirmation** フィールドに一時パスワードを入力し、**Temporary** フィールドを **ON** に設定したままにします。
9. **Reset Password** をクリックしてから、確認ポップアップで **Change password** をクリックします。

ユーザーはデフォルトで有効になっており、この一時パスワードを使用して Web コンソールにログインする際に新しいパスワードを設定する必要があります。

改訂日時: 2023-01-23 07:41:55 +1000